

アフリカンダンサーの心のあり方

吉住 奈々

第1章 序論

1. 動機

私は数年にわたって、日本でヒップホップというジャンルのダンスを学んでいる。それは一から十まで講師による振り付け、構成が決まっており、完成させた一曲のダンスを、舞台に立ちパフォーマーとして観客に見せる。学んだことを吸収して音楽に体を揺らすこともあるが、基本的には日本で「ダンサー」と呼ばれる人々はおおよそ、講師か生徒かで見せるためのダンスである。しかし私が初めて観たアフリカンダンスは、私が持っているダンスの概念を覆すものであった。大学の授業の一環で、アフリカ人と交流する機会があり、たまたま目の当りにしたアフリカンダンスは、伝統的なステップはあるようだが、型にはまった構成はなく、実に自由に皆が一体となってアフリカンダンスをしているようだった。私は今まで、作品として作り上げるダンスの達成感や仲間と共有する喜びに幸福を感じていたが、アフリカのダンサーは果たしてダンスを踊ることに幸福という価値観を抱いているのか。私が今まで学んでいたダンスの、観客とパフォーマーではなく、オーディエンスとの境目のないダンスは、どのような心のあり方によるものなのかということに興味を持った。

2. 先行研究のレビュー

今までの、アフリカの舞踊に関する主な研究は、舞踊そのものの形態についてのものか、どういった場面でダンスが踊られているか、という部分に着目したものであった。たとえば、松田は庶民の語り技としてのダンスのありかたを、ポピュラーアートとして論じている（松田 2014）。遠藤は、アフリカの生業形態を元にして、アフリカ舞踊から見るアフリカ社会のあり方を論じている（遠藤 2001）。しかし、これらの研究からは、ダンスに対する心の

あり方を読み取ることはできない。そこで、実際にアフリカのダンスを体験してみたところ、アフリカ出身のダンサーであるニヤマ・カンテは、リズムを体感して覚えなければダンスは踊れないと語っていた。よってダンスと音楽は密接に関係しており、その部分も掘り下げていかなければならないのだ。

それと同時にアフリカ人の幸福の観念について考えてみようと思う。幸福についての先行研究では、アフリカの伝統文化を日本と比較している研究がある。例えば、長谷川は、アフリカの子供の教育を通してアフリカの子供の純粋な言動を日本と比較して、いかにアフリカから幸せを学べるかという点について述べている（長谷川 2013）。一方、松田は、アフリカ人独自の生業形態や政治形態などに高い能力があると認めたくて、日本と比較しつつ幸福について論じている（松田 2014）。白戸も、同様の研究を通して幸福について述べている（白戸 2011）。この二つの視点による研究では、日本人の目線でいかにアフリカが優れているかが論じられている。アフリカ人自身が「私たちは幸福である」と提唱しているわけではないのだが、アフリカ人の目線に基づいて、幸福を読み取ることは十分にできるのではないかと考える。

この論文では、これら二点を照らし合わせ、アフリカ人がダンスを踊る上で幸福感があるのかといった、ダンスに関わる観念を研究し、論じていく。

現在研究されているアフリカの舞踊は、大きく分けて4つに分類されると遠藤は述べている。それらは、①通過儀礼としての舞踊（子供の誕生、結婚、成人、葬式）、②食料取得に関する舞踊、③戦闘舞踊、④医療舞踊の4つだ（遠藤 2001: 25-28）。本論では、これらを舞踊と定義する。その一方で、文化的に行われる舞踊ではなく、ダンスの素晴らしさを伝承している、ダンスで生計を立てている等、パフォーマンスとしてアフリカンダンスを踊っている人々のダンスをアフリカンダンスと定義付ける。

3. 研究方法

ダンスを踊っている人（アフリカンダンサー）の、ダンスについての心のあり方や、長い時間をかけて構築された文化、観念を文献から読み取ることは難しいと考えられるので、実際に私自身がアフリカンダンスを体験し、異文化の理解を深めようと思う。自分だけでは分からない部分に迫るために、日本でアフリカンダンスを教えているアフリカ人数人にインタビューを行っ

ていくことが主な研究方法となる。

4. 本論の構成

第2章では、「1. アフリカンダンスを体験してみても」では、自分自身が体験したアフリカンダンスを通して、初めて分かったこと、感じたこと、文化的ダンス（通過儀礼としての舞踊、食料取得に関する舞踊、戦闘舞踊、医療舞踊）と共鳴する部分などを細かく分析し論じていく。「2. アフリカンダンサーにインタビューしてみても」では、アフリカンダンスを日本で教えているダンサーに直接インタビューをする。自分が体験して考えるだけでは限界があるので、何のために日本でアフリカンダンスをしているか、どういったときに喜びを感じるかなどを実際に聞いて、観念を探っていこうと思う。同時に日本のダンサーにもインタビューし、文化、観念の違いを浮き彫りにする。「3. まとめ」では、文献で得たアフリカ人の幸福のあり方や価値観を「1. アフリカンダンスを体験してみても」と「2. アフリカンダンサーにインタビューしてみても」に照らし合わせ、アフリカンダンスの背景から、観念を考察していく。

第3章では、本研究で明らかになった点を述べるとともに、今後取り組むべき課題についても触れる。

第2章 本論

1. アフリカンダンスを体験してみても

体験したダンスのリズムの名前は「マンジャン」という。そもそも、アフリカではリズムの名前とダンスの名前が一緒に使われている。何個とあるリズムの名前だが、同時にダンスのステップも数多くあるのである。この二つは密接に関係している。

私にマンジャンを教えてくれた講師ニヤマ・カンテは、「アフリカではこのステップを覚えておけば通用するし、とても喜ばれる」と言っていた。要するに、舞踊では、時と場合、地域によってそのリズムやダンスの形態は変わってくるが、ダンスになったとき、ポピュラーなリズムがあり、一般で受け入れられると言うのだ。日本でのダンスは主にジャンル分けがされており、

一人ひとりが専門のジャンルを習得しているため、何のジャンルかは誰が見ても分かり、踊れて喜ばれるという観念が無いように思われる。

3時間のワークショップの中で、3つの項目が組み込まれていた。最初に行ったのは、西アフリカの伝統的なジャンベという太鼓を使ってひたすらマンジャンのリズムを覚えさせられた。おおよそ6分程度の音楽の中でリズムの速さが3段階になっており、徐々に速くなるリズムを聞き分けて、ジャンベの叩く速さが変えられるようにならなければ、ダンスすら踊らせてもらえない。一貫性や法則の無い音楽で、ましてや聞きなれない民族音楽を聞き分けるのは難しかった。

ダンスのステップ自体は簡単なもので、右足、左足と交互に踏んでいくというシンプルなものである。しかし、同じステップを6分間踊り続けるのは簡単なものではなかった。日本で多く踊られているhip hopというジャンルのダンスを一曲踊るとしたら、平均4分程度で、長くて5～6分。これを踊りきるとなると体力を消耗し、とても楽しいものではない。しかしニヤマ・カンテは、6分間の同じルーティーンを何回踊っても楽しそうな表情を浮かべていた。これは他のアフリカダンスも同様で、代々木公園で行われていた「アフリカダンスフェスティバル」に行った際、そこにいたアフリカダンスは30分近く踊っていたが、勢いも衰えないまま、笑顔で踊り続けていた。日本人はダンスをスポーツと捉えがちで、まずは決められたルーティーンを踊ることに意識を持っていく。その結果、疲れが先行し、終わってからその達成感で「楽しかった」という感情に行き着く。しかし、アフリカダンスはおそらく、音楽とリズムが流れていたら体を揺らすことが「当たり前」であり、ステップは決められているものの、自由に好んで行っているのが見て取れた。

一番初めに行ったりリズム取りで、ステップの速さの変動に対応でき、体でアフリカ人の当たり前の感覚を体験した。聞きなれたリズムで自分にあった好きなステップを、耳で聞いて体で表す。リズムとダンスが一体となったのを体で感じた。ニヤマ・カンテは、足のステップだけ教えたら後はずっと「自由に、自由に！」と繰り返した。最初はその自由という感覚がまったくつかめなかった。手の動きから足の動きまで考えるのがダンスだと考えていた。何度か踊っていくうちに、探るように音楽にあった手振りを入れてみたところ

る、ニヤマ・カンテは「それだ、すばらしい」と大喜びしていたのだ。ダンスを「踊る」ということより、音楽で「遊ぶ」という感覚で踊ってみると、アフリカンダンスの観念に近づくらしく、ニヤマ・カンテも踊っていて、それがアフリカンダンスだと言っていた。

最後は、「ダンスのワークショップ」と銘を打っているにもかかわらず、アフリカの歌を教えてもらった。おそらくニヤマ・カンテは、まさしく「音楽を感じ、音楽で遊ぶ」ことをしているように感じられた。

実際に体験してみたことを通し、アフリカ人の「当たり前」の観念がこの論文のキーポイントになってくるのだと考える。アフリカ人にとっては、音楽がある世界が当たり前であり、流れたら音楽に乗ることが当たり前である。その当たり前が土台としてある上で、ダンスに対する楽しさがある。日本人の達成感という感覚とはまったく別の、コミュニケーション的な部分であると推測する。アフリカンダンスフェスティバルで、一人のダンサーが踊っていると、それを見ていたほかのアフリカ人観客も、パフォーマンスとは関係なく中に入っていき一緒にになって踊りだした。見られていることなど気にしない様子で、楽しそうに参加し、後ろのジャンベ演奏者からジャンベを奪い取り演奏した。お祭りのような状態だった。初対面でも、輪に入れば友人のような扱いになる。日本人には、対人関係に線を引く傾向があり、一定のコミュニケーションを重ねないとその線は消えない。しかし、アフリカ人は、音楽やダンスなど「楽しい」を共有することがすでにコミュニケーションであり、そこに線引きはなくコミュニティーが形成されるのではないだろうか。

2. アフリカンダンサーにインタビューしてみた

自身がアフリカンダンスを体験してもなお解明できなかった部分を、直接アフリカンダンサーにインタビューし、深いところまで追究していこうと思う。

今回のインタビュー対象者は、ギニアで生まれコードジボワールで育った、ニヤマ・カンテである。ワークショップでダンスを教えてくれたのもこのニヤマ・カンテだ。彼女は人生の大半を、世界各国を周ってダンスし続け、25年もの間日本でアフリカと日本を繋げるために、ダンスや歌で活動してきた。その原動力はどこからやってきて、そこまでのダンサーの心情には、「ア

フリカンダンスの心のありかた」の真理に迫るものがあるのではないかと思ひ、ニヤマ・カンテにインタビューすることにした。

まず、「アフリカダンスを踊っているときどんな感情なのか？」といった質問を単刀直入に聞いた。それに対しニヤマは「私は学校に行ったことがない。その代わり物心ついたときからダンスや歌をしてきた。家族みんな、街中みんなが踊ることを当たり前としている」と答えた。

生まれながらにして踊ることが当たり前ということは無心で踊っているのかと疑問を持ったが、更に「私たちは勉強はできないが、会話するだけで相手がどういった人なのかわかる。ダンスを見ただけで、その人のことがわかる。映画のようにストーリーとなって見える。勉強ができない私たちにとってコミュニケーションが最も大事で、その方法の一つとしてダンスを踊るのです」というのだ。彼女たちは、ダンスを全くパフォーマンスとして捉えておらず、コミュニケーションとして踊っているというのだ。

それを受け、「踊っている時、幸せという感情はあるのか？」という質問をしたところ「まるで海のように、終わりのない幸せを感じる。踊っている楽しさにその感情が生まれるというよりも、その人のストーリーを知れることや、私が教えたダンスを初めて経験する人が、上達し笑顔になることに慈愛のようなものを感じる」。これは、おそらくニヤマがダンスを他国で踊り続ける根底の観念によるものだと考えられるのではないだろうか？ ニヤマは、ダンスを技術として教えるというよりも、一種のコミュニケーション方法を他国で異文化である我々に教えることで、アフリカとの繋がりを感じ幸福に思うのではないか。

さらにニヤマは、上達する姿を見ると、親が子に対する感情に似たものを感じるのだそう。ニヤマに、「この幸福に匹敵するようなものはあるか？」と質問してみると、「幸せといっても、全く別の種類の幸せだが、海のような終わりのない幸せと考えると、自分の夫や、子供に対する幸福感が匹敵する。これは私の宝物なのです」と答えた。

そもそも私には幸せと思う感情を、宝物と言えぬ観念を理解するのが難しかった。なぜなら、私自身、ダンスに対して楽しいと思う感情や、やり遂げた達成感から、ダンスに出会えたことを幸せ者だと感じることはあるが、ダンスでコミュニケーションをとり、人と人とのつながりを、家族愛のような

幸福感に満たされるものとしては考えたこともなかったのだ。

ここまで質問を重ね、日本人のパフォーマンスとしてのダンサーのあり方と根本的に違う観念で踊っているアフリカダンサーに、逆に日本のダンスを見てどう思うのか質問してみた。「日本人のダンスは見ない。フィーリングで違うと感じる。私が唯一素晴らしいと思った日本のダンスは沖縄のダンスだけ。あのみんなが輪になって、みんなが踊って、掛け声の飛び交う様子は、アフリカのお祭りにそっくりだった。心から楽しいと思った」と答えた。ニヤマにとってダンスは、意思疎通や、価値観の共有のようなもので、手振りから何から全て決めて、細かすぎる日本人のダンスを、彼女はダンスと思わないようだ。

ニヤマはダンス以外でも、沖縄の人はフィーリングが合うと言っていた。初めて東京に来た時、誰もが彼女を避けたそうだ。そのことに心底驚き戸惑ったという。「アフリカ人は人が好き、話すことが好き。気になった人には、当然のように話しかける。しかし日本人は違った。みんな繋がろうとしない、気になった人にも話しかけないのが当然。最初は理解できず、病気になりそうだった」と語った。そして沖縄へ行ったとき、初めて日本人の方から話しかけられたと嬉しそうに言っていた。

アフリカ人にとってコミュニケーションは、息をするように当たり前で、大事なものであるのだ。それこそがアフリカ人の根底の価値観を作り出しているように思える。人と出会い、繋がること。そしてその人をよく知ろうとすることがアフリカ人にとって最も大切にしていることなのだ。

そして最後に、「今後ダンス活動を続けていく上で、夢はなにか？」という問いに対し、ニヤマは「日本人とアフリカ人が仲良しになることを目標にしている。アフリカのダンスを日本人が踊ったとき、どんなに同じように踊っても日本人らしさが表れる。そのことをいつも不思議に思う。その日本人らしさ出ているアフリカダンスを多くのアフリカ人に見てもらいたい。私が日本でアフリカダンスを教え、今度は日本人がアフリカに行ってそのダンスを見せる。それを繰り返していくうちに、いつか日本とアフリカ人が繋がりが、仲良しになることができるのではないかと信じている。そうなることが私の夢である」と語ってくれた。

ニヤマがアフリカダンスを伝え続けるのは、日本人とアフリカ人の価値

観が重なることを信じているからである。言葉も文化も全く違う国同士の価値観が完全には重なることは不可能だが、ダンスという共通の文化を通して、コミュニケーションをとり、異文化理解に踏み込むことはできるのではないか。お互いが歩み寄ることで、日本とアフリカが「仲良し」になること。人と人が繋がるのが、ニヤマにとってダンスをする根底にある観念であるように思われる。

3. まとめ

自分自身もアフリカンダンスを体験し、体と感覚で感じたことを、改めて直接アフリカンダンサーに考えを聞き、今まで踊っていたダンスのあり方と、アフリカンダンスのあり方の違いがどれほどのものなのか浮き彫りになった。私は今までパフォーマンスとしてのダンスの喜びのみを感じてきた。アフリカンダンサーが全くパフォーマンスとしてのダンスを踊ってないわけではない。日本でアフリカンダンスを踊る以上、興味を持ってもらい素晴らしさを伝えるためには、「見せるためのダンス」も踊る。しかしそこには今まで私の感じてきた、踊ることに対する楽しさや、作品を作り上げる達成感とはまた違うものであった。ニヤマは、確かに楽しさも感じるがその楽しさは体を動かすことではなく、相手のことを知ることができる楽しさだといっていた。私がアフリカンダンスを体験したとき、音楽に合わせて何度も何度も練習し、慣れてきた頃ニヤマのいう「自由に踊る」ことを経験した。その時、私は確かに自分らしさを感じた。今までの型にはまったダンスとは違い、羞恥も挑戦も楽しさも経験もすべてが合わさった私のアフリカンダンスがそこにあった。それを彼らは読み取り、知ることを喜びと感じ踊っている。そのコミュニケーション方法に、少し近づけたように感じる。

アフリカンダンサーがダンスを大事に思う根底には、自尊心も関わっているように思われる。私がニヤマと話したときも、アフリカンダンスフェスタでアフリカンダンスを見たときも、彼らには日本人と比べ物にならない自尊心を感じた。ニヤマは、「ダンスで相手がどんな人かを見ることが出来るのは私たちだけだ。日本人やほかの国の人たちには出来ないすごいことなのだ」と何度も繰り返し言っていた。アフリカンダンスフェスタでは、出演者だけではなく、観客のアフリカ人が飛び出していき、当たり前のように参加して

いる姿を見て自尊心を感じた。音が流れたら踊るのが当たり前という文化だけで、日本で開催され、多くの日本人が見ている中で、あんなにも堂々と踊れるだろうか。おそらく自国のダンスに対し、素晴らしい文化だと分かっている、それを踊る自分自身に対しても素晴らしいと思う自尊心があるのではないだろうか。

わたしは少なくとも今まで、ダンスを踊ることに対して、自分に自信がないからこそ、型を壊さず何度も何度も練習した。その結果、ダンスが作品となり、その喜びは達成感によるものとなった。彼らは自尊心の上でダンスを自由なかたちに表現することができ、その結果、自国やダンスに対する誇りが生まれ、大事に思うのではないかと考える。

第3章 結論

アフリカンダンサーの心のあり方として明らかになったことは、ダンスを踊る目的自体が、コミュニケーションをとるための手段だということである。アフリカ人にとって、ダンスを踊る行為は当たりの文化になっており、そこにはコミュニケーション的なダンスのあり方がみられる。その根底には、「人と人との繋がり」をダンスに求める観念がある。みんなと仲良くなりたい、相手のことをもっと知りたいという欲求があり、ダンスを踊ることで相手のストーリーを知り、歩み寄って仲を深めることに幸福を感じている。

そして、逆に言えば自己表現方法の一つでもあるということである。それは、アフリカ人の経験、感情、環境など、自身のすべてが合わさり、彼らの言う「自由」という名の自己表現方法なのである。

相手を知り、自分自身のことを相手に伝える行為が、ダンスという表現で実現し、価値観を共有し、手を取り合うことが幸せとなり、そうすることはもはや「血」に流れているとニヤマ・カンテは述べていた。

アフリカ人が最も大事にしているのはコミュニケーションであり、文化の違う者どうしが一番わかりやすく、親しみやすい方法で異文化理解するためにダンスという文化があり、このことこそが、アフリカ人が当たりに踊れることの根底にあるのではないだろうか。

なお、今回の研究では、生業形態や生活の中に、アフリカンダンスに現れ

ているものを読み取る事ができなかったので、今後の課題としてアフリカ人の価値観を、アフリカ文化から読み取る必要がある。

更に、一人のダンサーだけでなく、ほかの環境にいるダンサーにインタビューを行い、それらを比較し、照らし合わせ、より深い観念に迫る必要がある。

参考文献

- 綾部 恒雄・桑山 敬己(編) 2010年 『よくわかる文化人類学』 ミネルヴァ書房。
遠藤 保子 2001年 『舞踊と社会』 文理閣。
勝俣 誠 2013年 『新・現代アフリカ入門』 岩波新書。
菊地 滋夫 2006年 「アドリブとしての憑依——自由と規範——」 『接続』No.6, pp.98-113、ひつじ書房。
小林 慶太 2013年 『Pen』 阪急コミュニケーションズ。
白戸 圭一 2011年 『日本人のためのアフリカ入門』 ちくま新書。
長谷川 裕二 2013年 『日本がアフリカを救うのではなく、アフリカが日本を救うのだと僕は思う』 パレード。
船田クラーセンさやか(編) 2013年 『アフリカ学入門』 明石書店。
松田 素二(編) 2014年 『アフリカ社会を学ぶ人のために』 世界思想社。
ヤンハインツ・ヤーン 1987年 『アフリカの魂を求めて』 黄虎秀訳、せりか書房。